

一 マタギたちの視点

石倉敏明 今日北秋田市の阿仁の根子^{ねこ}という地域に来ています。阿仁では比立内・打当・根子という三つの集落がマタギの文化を伝えていますが、根子はその中のひとつで、今日は三人のマタギの方々に集まっていたので、皆さんから、それぞれの実践のあり方をご紹介いただきます。皆さんとの関係や日々の生活の営み、芸能や芸術といった表現との関係などを考えていきたいと思っています。最初にマタギの頭領にあたる「シカリ」で、今は地域を越えて集団猟をまとめていらっしやる鈴木英雄さん、そして船橋陽馬さん、佐藤歩さんという順で、自己紹介をしていただきます。と思います。

鈴木英雄 マタギといっても、私は生まれた時からにも意識することもなく、農家の跡取りとして生まれました。今やマタギ、代々マタギの家系で九代目です。祖父は、私

が生まれる前からシカリをやっておりました。その関係でクマが授かると必ず私のうちまで運んできて、それから儀式して解体する。それを物心ついた時から見て育って、特別な意識もなく、生活の一部として捉えていました。それが今になって注目されるようになり、後継者・移住者がたくさん来てくれていきますので、マタギ文化を伝えて残していきたいと思っております。

船橋陽馬 二〇一三年にこの根子集落に移住してきました。根子番楽という伝統芸能が、この集落には伝わっていて、その根子番楽があるおかげで僕はこの集落にすぐ馴染むことができました。写真家という職業柄、どこに住んでも、移動して写真を撮ることは変わらないので、移住するのは苦ではなかったです。マタギは、二〇一四年から狩猟免許を取ってやっています。

佐藤歩 私はこの土地、根子集落で生まれ育って、いま二十八歳ですけれども、林業の仕事をしなから、マタギも

やっていて、根子番楽保存会の継承者、舞手でもありません。二〇一七年に猟銃の所持許可と狩猟免許を取得して、晴れてマタギになることができ、休みの日は山に行っています。仕事の林業は一〇年目なんですけども、マタギもやっています。山に馴染みの深いことをしていると聞きます。マタギをやっていると、山の神というのをよく聞いたりしますが、林業でも、山の神様に対する感謝を表す時も結構あるので、やっぱりマタギと林業は山に携わることで繋がっていると、すごく勉強になっています。

石倉 秋田県横手市の山内地域に暮らし、狩猟と制作を続けている絵画作家の永沢碧衣さんに自己紹介いただきました。と思います。

永沢碧衣 秋田公立美術大学に在学中に、阿仁・根子・当地域に通うことがあり、鈴木英雄さんに出会ってマタギの文化に触れ、それをきっかけに狩猟の免許と猟銃免許を取得しました。そこからマタギの文化について教わりながら、横手市から通うという、通い猟師みたいな形で関わらせていただいています。私は絵画作家として、横手市でアトリエを構えつつ、秋田県内のいろんな地域の狩猟する人、マタギの方たちを訪ねながら作品を制作するという暮らし方をしています。

石倉 マタギとは一体なんなのか、いわゆるハンターとの

違いも含めて、ご説明いただきたいと思っています。

鈴木 私たちは山の神を信仰しています。昔であれば、山と集落、村と下界とを一緒にしない。山に入ると山言葉を使って、地元の村のことは絶対口にしない。女性の身につけたものを持っていかない、結婚式のものを持っていかないなど女性に関するものを断ち切って山に入りました。それは、今は薄れてきていますが、すべて自然界は山の神のものだという意識の下で私たちも動いている。マタギは狩猟だけでなく、自然が関わる、山菜やキノコを採るなど、山の恵みを頂いて生活するのがマタギだとも教えていますので、その面ではハンターとマタギの違いというのが多少あるのかなと思います。

石倉 一般に、マタギという専門の職業があるようにイメージしてしまいがちですけれども、実際には精神的な意味でも、生き方としても、歴史の中で培われてきた価値観や自然に対する態度を大切にされていますよね。例えば、自然からの恵みを「授かる」という言葉をとても大事にされているように思います。

鈴木 例えば、(佐藤)歩君も若い人たちも一旦山に入ったら、皆平等ということで、熊を仕留めると「勝負した」と言います。勝負した中で仲間が集まってくると、いいのが授かった、大物が授かった、って喜んでくれる。そして授かったものに対しては、ケボカイ、授けてくれた山の神



「マタギ勘定」で均分された肉（撮影：船橋陽馬）

にお札をして、熊の魂を山の神に返すという儀式で儀式をしてから解体します。解体したものは、どんな人でも、皆平等に分けます。私たちはそれで、ひとりの仲間として認められているということ、頑張ってくれると思います。

石倉 ケボカイと「マタギ勘定」という獲物の平等な分配方法についてご説明いただきました。例えばシカリの英雄さんも、若手の歩さんも、全員同じ分量をいただくということでしょうか？

鈴木 同じです。例えば、たまたま毛皮を欲しい、熊の胆を欲しいという人がいて、少しのお金に換えた時は、そのお金もまた平等に分ける。もう授かったものは皆のものなので、「俺初めて熊授かったから、俺その毛皮欲しいんだ」「じゃあ持ってけ」と言いながら、自分で撃ったもの、勝負したのも、お金を出して手に入れる。皆のものという意識を持って、猟に行っています。だから、誰が獲っても、皆のものなので、勢子とやっていることは分かるんですが、最後にはひとつになる。だから誰も「俺だつて熊撃ちてえ」とかいいう気持ちにはならない。皆平等で、仲間ひとつになってやっています。その点はハンターとはどうなのかな。

石倉 なるほど。船橋さんは写真家として長く活動を続けていらっしやいますね。どのような経緯で、阿仁に移住し、マタギになったのでしょうか？

船橋 元々マタギの写真を撮りたくてこの阿仁の地域に住みました。マタギを撮り出したきっかけは、英雄さんにマタギのことをいろいろ教えていただく中で、英雄さんは僕みたいな他所者にも優しく接してくれるのですが、マタギというのは仲間意識がすごく強かった。その中に入って行って、写真を撮るといいうのは結構難しく、なかなか気持ち良く写真が撮れないとずっと思っていて、だったらこの輪の中に入るしかない。自分がマタギになって、写真を撮り出したら、きっと誰も文句は言わないだろうと。そう思ってマタギになったのはいいんですけども、今度は一番大変な熊を追う勢子役を与えられ、カメラ構えてる余裕なんか全くないんですよ。勢子って、声を出しながら何人かで同時に山の尾根の、峰のほうに向かって熊を追っていくんです。道なき道を、隣の人の声を聴きながら、あまり距離も離れないように、一斉に一列になって追うのですが、隣の人が見えるわけではないし、声だけを頼りに上がってかなきゃいけないので、カメラ構える余裕は全くない。傾斜も厳しいところもあるし、なんでマタギやっているんだろうと思うぐらい。勢子を最初やる人はそれぐらいの思いしながらやるんです。

石倉 歩さんが最初に鉄砲を持って猟に入った時に、僕も同行させていただきました。その時も、後ろから付いていくだけで精一杯だったことを覚えています。歩さんは阿仁

の出身ですが、実際に山に入ってみて、どうでしたか？

佐藤 僕は林業をやっているので、山歩くことに関しては苦労することはないです。ただ、マタギの道というか獣の道というか、そういう道を歩き始めた感じなので、結構苦労します。足元も滑りやすかったり、柴とかを掴んで上るような場所の悪いところもあるので、マタギは命がけの精神で、皆で協力して熊を追いつめてやるものだと思います。山歩きは大変ですけども、皆とのチームワークを大切にしてやるのが魅力的です。

鈴木 熊が授かると、山の神に感謝、授けてくれたお札の言葉、また熊の魂を山の神に返す、そしてまたたくさんのお札を授けてください、というふうにお祈りするわけです。それから初めて、皆で解体します。昔は必ず一頭ごと、うちで熊を解体するのが習わしでした。その当時はリュックもナイロン袋などの容れ物もない時代で、また、解体すると血とかで汚れるので、それで運んできたんだと思えます。今は山で、危なくないよう授かった場所から多少移動したりしながら儀式した後、皮を剥いで、手足をばらばらにして、皆で背負って車の近く、また、水場の近くで骨から肉離したり、内臓洗ったりするというのをやりますね。小分けして背負ってこられるので、山を降りる時もすごく楽。そして肉をばらばらに離し、それをまたさらに切って、偏らないように混ぜるんです。何人だから何キ



ロずつつて分けるんですけども、自分のところの部位が入っているかはわからないです。だから不公平がありません。

船橋 僕もカメラだけ持って、皆さんの巻き狩りに付いていった時、ただ付いていった僕にできえ、マタギ勘定でその時獲れた熊を分けていただきました。その精神が素晴らしいなと思っただし、ほんとに驚く出来事だった。これを獲りに皆さん来てるのに、なんで僕みたいなのに分けてくれるんだらうと、その感覚が不思議でした。ほんとにマタギ勘定って均等なんですよ。例えば皮というのは分けられないじゃないですか。その皮をどうするかというところ、欲しい人に一万円で売ります。その売った一万円を皆でまた分ける。

鈴木 その思考、経験があつて、山の中入れば同等に貰えるという喜び、そういうものがあつて。それを今若い人たちにも同じように教えている。そんな分け方の中で、喜びや仲間意識が生まれ、また次に頑張ろうという気持ちが生まれてくる。

石倉 ハンターとマタギの違いについて、今の説明で分かっていただけではないかと、今思います。ところで山内の永沢碧衣さんも、最近はその地域を越えて、英雄さんたちの猟に行っていますね。山に入って行って、そして絵画作家として絵を描いている。永沢さんが山に入るモチベーションとか、考え方を紹介していただけますか。

永沢 小さい頃から、釣りのために山川を歩くような生活をしていました。でも溪流釣りは、漁の期間が決まっています。春と夏の川のところしか、山に入ることはありませんでした。でもマタギの本を読んだ時に、年中山に關わる仕事をしているというのを聞きしました。ハンターとは違うマタギ独自の世界観を築き上げながら、山と繋がろうとしていたり、山からいただいた授かりものにマタギ勘定のような仕組みを取っていたり、現代人だとおおよそ考えつかないような精神性の中で山に關わっていると思いました。私もできれば、その精神性から学び得たいものがあると思っただし、この精神性は阿仁の文化としてだけでなく、人間として学ぶところがあつて、他の土地でも、マタギという職種を超えて、なんらかの形で活かせると思っています。阿仁



前ページ：永沢碧衣「露わる者」2018
 アクリル・岩絵具・ジェッソ・キャン
 バス/2.1m × 5m(※横長変形サイズ)
 上：永沢碧衣「背負う者」2018
 アクリル・岩絵具・アルミ粉・ジェッ
 ソ・ペニヤ/1.3m × 1.62m(※F100号)

ある阿仁は、有害駆除が比較的少ないと言われています。とは言え、伝統猟とは別の形で、有害駆除という非常に難しい現代の問題にも直面されています。

鈴木 栗に寄ってきた熊を駆除することがあります。檻でできた箱罾で、昔は熊を逃がしなさいって言われたんだけど、その熊がまた人間に危害を

のマガギの方々と一緒に狩猟の世界に飛び込んで、自分も半分当事者になることで、マガギの話や精神性や技術を学ばせていただいています。そこから得られたインスピレーションが絵になっていたり、また別の形でそれを仕事にしていたり、そういうことに務められたらと思っっています。

元々私も釣りをして山に入る時は、釣竿一本しか装備がなかったのですが、熊がいるというだけで怖く感じていたところもありました。でも熊という存在が、一年中山と共に暮らしている人からしたら、どういう捉え方をされているのか。確かに怖いんだけど、怖いだけじゃない。人に近し

いような性質や性格があったり、一人一人、人が違うように、熊も一匹一匹個性があるところまで熟知している。そういう人と近しいのか熊が人に近づいていつているのか、同調するような瞬間を、猟に付いていつた時に感じることはありません。この二枚の絵(前頁、上)は、山と熊、自分たちが今歩いている山自体が、地続きで自分たちであり、熊であって、そのシルエットを捉えようとしている自分たちが、どう熊を捉えて、どう接していいのかというのを考えて描きました。狩猟免許と猟銃免許を取り、今年からようやく実際に自分が銃を構えて猟場に行く側になったので、また描いている絵柄が変わっていくかもしれません。

石倉 永沢さんのようにマガギの文化を知りたいとか、狩猟してみたいという若者は、最近増えてきているように思います。一方で今、秋田県では熊が人里の近くに顔を出すようになっていて、「有害駆除」として捕殺される例が増えていきます。「山の神」の信仰が

加えるということ、今は必ず駆除しなければいけないなっています。でもやっぱり、山に行つて授かろうが授かるまいが、山を歩く時は熊と勝負という言葉があつて、勝負しようがするまいが山歩いた満足感でいっぱいなんです。駆除した熊に対しては、ほんとに「駆除」という感じで喜びとかはないです。

船橋 マタギの人たちは、有害駆除で熊を捕りたいとは思っていない。でも熊は民家の近くや、栗を拾いに行くために、人間がつけた栗に、どうしても来てしまう。捕らざるを得なくて捕る熊なので、そこに対する思いというのは、皆さんいつものマタギの感覚とは違うんだろうなと。

石倉 「害獣」である熊を解体する時には、「ケボカイ」の儀式はされるんですか？

鈴木 同じようにケボカイをやつてから、いただきます。マタギはどうであれ、捨てることはしません。

二 人類学者との対話

石倉 前半の話を受けて、後半では、世界各地で民族誌研究を続けている人類学者とマタギの対話に移りたいと思います。

奥野克巳 私は東南アジアのボルネオ島の熱帯雨林に住む、プナンと呼ばれる狩猟民の調査研究を十五年ぐらいし

あるいは世襲的なリーダーは見当たりません。階層性は無く、すべての人が平等だという原理が浸透しています。逆に、リーダーが獲物や財を独り占めしようとする、人々は彼に嫌悪感・不快感を示し、離れていくのです。平等主義的な原理が隅々にまで行き渡るような社会が作られていたという点で、プナンもマタギとよく似ていると感じます。

お話から私が感じたのは、人と人との平等という原理・原則とともに、マタギの世界には、人間と動物の間、つまり人と自然の間の平等の原理があるのかなということでした。有害駆除をした熊に対しては、喜びが薄いというお話が出てきました。そして勝負した熊に対しては、喜びを感じるんだとおっしゃっていました。熊と真つ向から勝負することにおいて、熊が特別な主体的存在として立ち上がってくるのではないかと思うんです。箱檻の中に入っている人間が優位に立ち、熊が捕らえられて劣位に立たされていくわけですね。だから、悲しい、喜びが感じられない。しかし山の中で勝負するということは、人間と熊の間には対等な関係が横たわっている。勝負する相手としての熊、それに対峙する人間という構図が、喜びの源泉ではないかと思えました。

そのこととの関わりでもう一つ言いますと、「山言葉」

ています。一九九〇年代は二年間同じ島の農耕民の村で調査研究をしていたんですが、なぜその狩猟民に関心を持ったのかというと、人間が根源的にはどういふ存在であったのかを知りたかつたからです。人類史を振り返ると、人類が二十万年前に誕生してから大部分の時期、狩猟と採集だけに頼って生活してきました。私は、狩猟を生業とし、焼畑農業を始めてあまり日が経っていない人たちに強い関心を抱きました。彼らの行動や考えの中に人間の原初の姿の片鱗を探りたいという思いで、二〇〇〇年代になってから、狩猟民プナンのフィールドに入りました。最初一年間そこに住んで、それから毎年二回ずつ、春と夏にフィールドに行つて、彼らとともに狩猟をしたり、行動しています。

船橋さんが「マタギ勘定」というお話をされましたけれども、実はプナンも全く同じことをやっています。私は常に狩猟に付いて行きながら何もしていないのですが、獲れたヒゲイノシシを木材伐採キャンプに売りに行くと、その売却金を狩猟に出かけたメンバーで平等に分配します。そこに私もなぜか加わる。つまり、私にもくれるんです。要らないと言つても、必ず受け取るように言うのです。獲物が捕れた時には、肉を人々に全く平等な形で分配することが、人々の生き残りを保証してきました。売却金を平等に分配するのは、その名残です。狩猟民の社会には、恒久的な

が興味深いです。プナンも同じように、森の中に入ると、自分たちの共同体で日常的に使っている言葉とは別の言葉を使います。言い換えれば、動物と対峙した時や、動物を殺して持つて帰ってきた時に、当の動物に対して、その呼び名を変えなければいけないという習慣があるんです。例えば、シワコブサイチョウという鳥がいます。目が赤い鳥なのですけれども、狩られてきたシワコブサイチョウの死体を前にすると、「赤い目」という別の呼び名に変えます。プナンがなぜ名前を変えるのかというと、実は動物も人間と同じで、名前を不意に呼ばれると気を悪くするというんです。だから名前を変えて呼ぶ。名前を変えないで、そのままの名前を呼ぶと、気分を害した動物の魂が天界に駆け上がり、カミナリの神に告げ口をする。告げ口された神は、動物に同調して天候の激変を引き起こします。雷鳴を轟かせ大水を引き起こしたりして、人間に災いをもたらして、罰を与える。自然の猛威を回避するために、プナンには、動物に対して粗野な振る舞いをしてはいけないというタブーがあるのです。

文化人類学では近年、「パースペクティヴィズム」と呼ばれる、先住民に広がる考え方が持ち出されることがあります。パースペクティヴというのは「視点」のことです。動物たちは視点を持っていて、動物の視点でもって世界を眺めている。人間にはイノシシの血と見えるものが、ジャ



山を行くマタギたち（撮影：船橋陽馬）

ガーにはお酒に見えるという具合に。プナンが動物の名を変えざる習慣は、ある種のパースペクティヴィズムです。人間に粗野な振る舞いをされたら、動物はそれを見聞きして気分を害してしまうと、動物の視点に立ってプナンは考えます。こうしたパースペクティヴィズム的な論理は、檻の中に入った劣位の熊に対して、優位に立った人間という図が成立しない関係性の構築と維持につながっているように思えます。それは、人間だけが唯一特権的な存在で、自然あるいは動物を外部位化し、動物を人間の劣位に位置づけてしまうのではなくて、人間と動物の間に対等な関係性を広げさせていくための原理になっている。プナンの動物の名前を変えるというような振る舞いの背景にある原理のようなものが、マタギの山言葉にもあるのではないかと思います。

石倉 平等と喜びということについてはいかがでしょうか？ 例えば箱檻に入れた熊との関係では、人間が優位に立ってしまう。それよりも山の中で猟をする方が、喜びが強いでしょうか。

鈴木 それはあります。たとえ熊が授からなくても、満足感でいっぱいです。何日も授かってなくても、明日誰が何人行ける？ という感じで、不満不平を言う人はひとりもいません。それはちょっと自分でも、どういうことかなって思うぐらい、山というのは私たちが惹きつけています。

船橋 先輩たちは猟期になればそわそわしだす。山に行きたい、熊に会いたいと言うんですよ。なんで熊に会いたいと言っているのかと考えると、マタギの人たちは、熊に会うことで自分の内側にある血が騒ぐというか、自分の存在意義を確認しに熊に会いに行くというか、なんかそういう感覚もあるのかなと思っています。

石倉 歩さんは、マタギの一員になって、先輩たちをどんなふうに見ていたのでしょうか？

佐藤 僕がマタギになる年は有害駆除が結構多かった年でした。一ヶ月間で、制限頭数と同じくらいの駆除がありました。まだ猟友会に入って間もない時期でしたが、自分も先輩が同じ量の肉を分けてくださった。二十年以上やっているベテランもいれば、一年目の僕もいるんですけども、皆、五キロだったら五キロの分け前をもらう。そういう

うマタギの人の昔からの精神が素晴らしく、かつこいいなと思いました。

シンジルト 私は主にチベット高原における牧畜民と家畜動物の関係を研究していますが、日本国内では学生を連れて南九州の狩猟文化についても調査しています。ここでは、「距離」というワードを軸に、マタギ文化について三つの方面から、皆さんとともに考えていきたいと思っています。一つは「狩猟に見るジェンダーの距離」、もう一つは「狩猟に見るマタギたちの身体距離」、最後に「狩猟に見る山と里の距離」です。

まず、「狩猟に見るジェンダーの距離」に関してです。山に入る前に女性と接することを避けたり慎重であったりしないといけないといった慣習はさまざまな地域にあるようです。私が南九州で調査した時もそれに近いものがありました。ここには現役の女性猟師もいますが、山の神を祀る場所をその女性猟師は避けて入山するようです。なぜかというところ、山の神が女性で、かつ、そんなに美しい女性ではないので、風貌のいい女性が山に入ると嫉妬します。結果、その女性はひどい目に遭うからだと言います。そのため、女性猟師は、男性猟師に頼んでお酒やお米を代理で捧げてもらうのです。東北でも山の神は女性であると理解され、だから山の神を祀る儀礼の場面などでは、女性は避けられる存在になっているのでしょうか。

現在、猟師の高齢化が問題になっています。若手の猟師を獲得するため、環境省などは「狩猟の魅力まるわかりフォーラム」といったイベントを開いています。その効果もあり、女性の猟師（狩りガール）もそれなりに増えています。これは狩猟全体から見ればとてもいいことだと思います。そうすると、女性を避ける慣習と、狩りガールが登場しているという現実とのギャップが問題になります。これまでの狩猟におけるジェンダー距離というものは、今どうなっているか、今後どう変わりうるかをお聞きしたいと思います。

二つ目は「狩猟に見るマタギたちの身体距離」についてです。南九州で狩猟に同行させていただいた時、猟師たちは獲物について互いに無線で通話していました。待機場所によって肉眼では獲物が全く見えないものの、見える人がイノシシや鹿がどの方向に向かってるかをリアルタイムで伝えます。映像ではなく音声での発信で、広い山の中では、互いに何らかの共通の身体距離感を持つていないかというのを推測します。それは一体どのようなものかということを知りたいと思います。おそらく都市に生活している人間には、あのような感覚はないと思います。その意味で猟師になることは都市住民が失った身体感覚を取り戻すことを意味するのではないかと考えたりして

います。

最後に、「狩猟に見る山と里の距離」です。山言葉や里言葉はよく知られています。山に入る時には、きっぱりとそれまでの日常的な言葉をやめるといってわけですから、山と里との間には、はっきりとした言語の距離や境界があります。言葉が二分されているということです。そうすると、この山言葉から、私はマタギ勘定のことを連想し、両者には類似性があるのではと思います。山言葉の背景に、山と里の距離や境界というものがあるとすれば、マタギ勘定という人間の振る舞いの背景にも山や里の距離や境界があるのではないかと。つまり、マタギ勘定というのは、山言葉と同じように狩猟という行為に関わる限りの人間の振る舞いであり、狩猟が行われないいわゆる日常生活においては適用しない、と理解して良いでしょうか。

石倉 まずジェンダーのことから考えていきたいと思いますが、山の神の性別は地域や文脈によって女の人だったり、男の人だったり、非常に多形的で、秋田でさえいろいろな考え方がありますよね。例えば、永沢さんのような女性の狩猟者は、かつては絶対山に入れちゃいけないかったかもしれない。しかし、今、山に入っていく女性、狩猟したいという女性も増えていると思うんです。その辺り、どのようにお考えですか？

鈴木 今、永沢さんを山に連れて行くのは一般狩猟です。

これからの季節に集団で春の猟とか、打当のマキ狩り（集団の猟）です。女性は無理かなというように険しいところへ行くので、打当に来た場合は、それなりに安全な場所を確保します。勢子でも大丈夫ですけども、ただ猟への理解力のない人が来たかどうかは、検討課題で、答えは出せません。

石倉 ということは、現在進行中の開かれた問いとか、伝統と未来の間で、今まさに「距離」を探っているということですね。素晴らしいことだと感じます。では、二番目は、マタギの身体距離について、山に入っていく時に、普通の人には分からないような道を発見する身体能力とか感覚というのは、尋常なものではないと思うんですが、いかがですか？

佐藤 先輩たちには「ああ、あそこ行けばいるんじゃないか」と野生の勘で熊の気配を感じる人がいて、鋭い勘があると格好いいなあと思います。

船橋 勘というか、無線のやり取りで「そののだから（山中の平地）、くまいった」とか「しもさ、くまいった」とか、僕からするともう全然分からないです。「しも」ってどっち？ 僕が今ここにいるけど、この人はこっちにいて、その人が言う「しも」ってどこだ、みたいなの。要は皆さん、山を熟知している。基本的に熊が通る場所は分かっているから、マチパ（撃ち手）に人をつける時も、「おめ

えのどさ、よくいくからな」という声が最初するんです。だから、そういう共通の認識として山が見えているから、なんとなく分かるんじゃないでしょうか。

石倉 心的なマッピングができていられるのかもしれないですけど、それはカメラを構える時と違う見え方なのではないか？ これは、三番目の「狩猟に見る山と里との距離」の問題とも関係していると思うのですが、里の感覚とやばい違うんでしょうか。

船橋 里とは違います。山は何があるか分からないです。山に入り慣れてないと、春に来て、秋に行くとき全然風景が違って、道に迷ったりします。山での知識を持っていないと、熊には出会えない。感覚が研ぎ澄まされていくことが重要です。

石倉 山と里で異なる空間の感覚があり、知識のあり方も違う。そしてマタギには、両者を行き来することが求められているわけですね。

船橋 里の暮らしがあるから山があるというのか、日々の暮らしを考えると山を大切にしなければということじゃないかと思います。

石倉 山から獲物を授かることによって、山と里が入れ子になっている。山は里の暮らしがあるからこそ生きてくるし、里の社会も山からいただくものがあって成立する。この距離感に興味深いですね。

シンジルト 「かみ」「しも」と言われても全く分からな
い、というご体験は非常にリアルで面白いです。それでも
経験を積むことで、なんとなく分かってくる、という感覚
はおそらく言語化できないものでしょう。人は山の中で暮
らしているけれども、同時に山は人の中にある、というよ
うな感じがしました。そして今言われた、山と里とは、実
は不可分の一体だ、というお考えも大事だと思いました。

石倉 ここには性のあり方も関わっています。永沢さん、
ジェンダーについて、当事者として里から山に入っていく
時、何か感じることはありませんか？

永沢 山神さまの神社では、私は一歩引いたところでマタ
ギの方たちが礼拝するところを見守っています。山の神さ
まは女性なので、お粗相がないようにと、今の自分ができ
る限りの礼法で、心の中でも行為でも、お辞儀をする形
で、心構えとしていつもいます。また、地元の山に入る
時、猟友会の人たちがいる中で唯一の女性で、体力的に力
仕事が思うようにできないから足を引っ張るのではとか、
自分が女性だからこそできることとできないことも現場に
入ると見えてきて、これからの課題と感じています。

石倉 デリケートな問題ですが、ぜひ今後永沢さんに、
このことを考え関わってほしいと思います。

川瀬 僕は二十年ほどエチオピアに通って、世襲の楽
師、吟遊詩人たちと生活をしてきました。職場は大阪の国

小さな鈴の音、あるいはラジオの音のようなものが、実
際、熊と人の出会い頭の事故を防ぎうるのか、鈴木さんに
おたずねしたいです。

船橋 本当は高い声を出したほうがいいという話はずっと
されていて「ほりゃあほりゃあ」という。でも僕は、勢子
の先輩方がやっている声を聞いて、そこまで高い声は出す
わけではなくて、普通に叫ぶんです。「おー！」と叫び
ます。

川瀬 その響くような声は熊を驚かせたりしないですか。

船橋 あえて熊を追い出すために、声を上げます。

川瀬 なるほど！ 熊を追い出すために声を出すのです
ね。僕は逆に、勢子のみなさんは、熊をおびき寄せるた
めに声を出すのだと勘違いしていました。声を出したり、
歌ったりして動物をおびき寄せるということではないので
すね。勢子同士の声の出し方について、特に気を付けてい
ることはあるのでしょうか。

船橋 声で自分との距離を確認するんです。

鈴木 私たちはラジオとか蚊取り線香をつけて、キノコと
りに歩いています。熊に人間がいるということが分かれば
それでいい。出会い頭に遭うのが怖いのであって、熊は闇
雲に人間を餌にしたり、いきなり襲うということはないの
で、事前に人間がいることを分かせればいいと思いま
す。そうすると熊は去っていきます。ただ、仔熊はそんな

立民族学博物館なのですが、現在、岐阜の西濃地域の、山
深く自然豊かな場所にいます。ここでも、熊は身近な存在
であるといえます。

今日のお話の中で、熊を「授かる」、この言葉がすごく
印象的でした。熊を授かることを通して山をいただき、祈
り、感謝し、熊の魂を山に戻す。そこにおいて、熊は消費
社会の中で食される対象としての肉でもなければ、駆除す
べき存在でもない。熊を授かるという行為、態度を通し
て、人と自然が有機的に繋がっていく。この繋がりが、循環
を保持するなかに、マタギの営みの醍醐味があるのでは、
と思いました。

僕の質問は音に関するものです。人と動物が、ある種の
声・音を介して対話することもあるし、欺き合うこともあ
る。あるいは互いの縄張りを主張するときに音を使うこと
もあります。そこで音について、二点質問があります。

一点目は、勢子の声がどんなものかということ。船橋さ
んに実演していただけませんかでしょうか。猟に出られる
時、声を出し続けていないといけないとおっしゃって
いましたが、この声を実際に聞いてみたいです。二点目。う
ちの近所の小学生たちは熊よけの鈴をランドセルに付けて
います。僕も昔、例えば松茸狩りのために、近所の山に入
る際は、小型ラジオを持って入り、ラジオの音を出しなが
ら、熊との出会い頭の事故を避ける工夫をしていました。

こと関係なく人間に近寄りたりするので、そういう時は親
が怖いです。仔熊がいた時はなるべく逃げたほうがいいで
す。それ以外は、音を出すと。母熊も音を聞いたら仔熊を
連れていくと思います。

石倉 全体の議論について、いかがでしょうか？

奥野 永沢さんが、マタギの方と一緒に同行されて絵を描
かれているということが、面白かったです。単に熊と人間
の距離が近いだけではなく、個性があるところまで感じら
れているのではとお話されたとともに、熊の魂をどう
いうふうに扱うのかに関心を持たれていました。マタギの
方に寄り添いながら、絵画で表現しようと思われていること
の背景についてお話しただければと思います。

永沢 私はたまたま昔から自然に興味があり、そして絵画
を描いていたにすぎないと思っています。実猟に自分も参
加するようになってからは、言葉では言い表せないような
身体的な感覚と、精神的に山に入っていくことで、今まで
自分が日常生活でいた里での言葉や考え方や感じ方が生ま
れ変わるような、里から山に入る時に自分の中の切り替
えのポイントみたいなものがあるような気がしてきました。
山に入って実感しているのは、今自分がいるところに数分
前までは熊が立っていたかもしれない、私は熊を探そうと
しているけれども、熊もこちら側を見ているかもしれない。
熊側の視点だったり、猟師側の視点だったり、音、風、匂

いをマタギの人たちは全部分かっていて、蓄積された言葉で言い表せないようなものがあまりに大きかったということです。

石倉 マタギの視点は、不動の安全地帯から観察する、という前提を覆す力を持っていそうですね。視点はいつも異種と入れ替わり、多感覚の次元へと開かれていく。そうした感覚を求めて、マタギと一緒に山を体験し、自然について考え、表現するというのを、永沢さんの実践から感じます。タイム・インゴールドという人類学者も言っているように、何かについて知ることを超えて、何かと共に考え、アート（技芸・芸術・芸能）と共に生成するということが、これから大きな主題になってくるはずですよ。今日の議論も、マタギと共に考える人類学、あるいは人類学と共に考えるマタギの実践なのかもしれません。そこに芸術実践の要素が加わることで、より大きな視点から問題をとらえることができたと思います。

発言者

鈴木英雄

阿仁担当で代々マタギの家に育ち、担当マタギのシカリ（頭領）を務める。猟友会役員をはじめ、マタギ学校の講師、自然観察指導員、森吉山ガイドクラブ等で幅広く活躍する。

船橋陽馬

男鹿市生まれ。イギリス等各地で花屋として働いた後、多摩美術大学に入学。卒業後、写真家としての活動を開始し、二〇一三年に阿仁根子に移り住み、マタギ文化や根子番衆の担い手となる。

佐藤歩

マタギ発祥の地とされる北秋田市阿仁根子に生まれる。高校卒業後、地元の森林組合に就職。二十五歳でマタギとなることを決意し、二代途切れていた家系の伝統を復活させる。

永沢碧衣

横手市生まれ。秋田公立美術大学在学中、山に一年中携わるマタギの生き方を知る。卒業後は自らも狩猟者となり、狩猟に同行しながら見えてきた視点や世界観を絵画表現としてアウトプットしている。

川瀬滋

岐阜県生まれ。映像人類学者。国立民族学博物館／総合研究大学院大学准教授。エチオピアの楽師、吟遊詩人の人類学研究、民族誌映画制作に取り組み。同時に人類学、シネマ、アートの交差点から創造的な叙述と語りを探求する。映像作品に『ラリベロッチ』『精霊の馬』など。著書に『ストリートの精霊たち』（世界思想社、

註

1 本稿は、二〇二一年二月十四日にオンラインで開催された、第五一回マルチスピリーズ人類学研究会の音声記録をもとに編集・構成したものです。

二〇一八年）、『エチオピア高原の吟遊詩人 うたに生きる者たち』（音楽之友社、二〇二〇年）など。